メディアにみる近代ドイツの「決闘試合」（下）[1)]

森田　直子

はじめに
1. 決闘試合とドイツ近代の市民社会
2. 市民社会とメディア
3. ドイツ近代のメディアとその影響
4-1. パンフレットに見る決闘試合
4-2. 文学作品に見る決闘試合
4-2-1. ハインリヒ・ハイネの詩
4-2-2. テオドア・シュトルムの短編小説
4-2-3. ヴィルヘルム・マイヤー＝フェルスターの戯曲
4-3. 絵入り雑誌に見る決闘試合
4-3-1. „Auf die Mensur!〔剣を構えて！〕“– „Auf der Mensur〔決闘試合にて〕“

4-3-2. 切り刻まれる身体

前節で取り上げた図2に戻ろう。そこには学生たちが決闘試合をする様子が漫画タッチで描かれているが、それは誌面の下半分を占める小咄の挿絵の一つである（図4）[2)]。「長い鼻」というタイトルの小咄には全部で三つの挿絵があり、それらによって風刺内容は容易に想像できようが、概略は次のとおりである。

ヴォルマーという名の学生は、人一倍鼻が長いゆえに[3)]、世界で最も不幸だと感じていた。学生仲間からも毎日のようにその長い鼻をからかわれていたが、ある学生が度を超す侮辱をしたため、ヴォルマーは彼に決闘を申し込んだ[4)]。闘いの最中、ヴォルマーの鼻先は切り落とされ、消えてしまった。不運を嘆きつつヴォルマーは医者に行き、「小ぶりな、いや、非常に小ぶりな鼻[5)]」を再生してくれるように頼み、手術を受けた。手術中に彼は気を失い、意識が戻ったときには

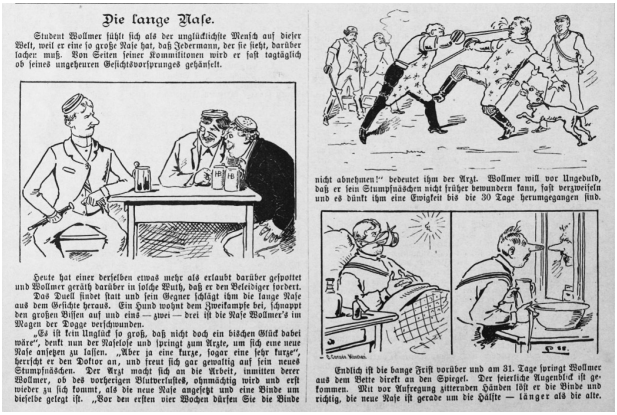

図4

図5

すでに鼻に包帯が巻かれていた。4週間は包帯を取らないよう指示されたため、ヴォルマーは辛抱強く待ち、約束通りに31日目に喜び勇んで包帯を取って鏡を見てみると……、彼の鼻は以前の1.5倍の長さになっていた、という落ちである。

決闘試合には防具で守られていない頭部の負傷がつきものであったが、とくに突き出た鼻が被害にあう確率は高く、それを誇張してユーモアとともに揶揄する作品は、あちこちに見られる。例えば、図5に示す『フリーゲンデ・

Von der Mensur.

„Was ist denn gestern bei Eurer Paukerei herausgekommen?" — „Herausgekommen — nichts; weggekommen — eine Nasenspitze!" — „Wo blieb sie denn?" — „Nicht zu eruiren; waren fünf Korpshunde im Lokal!"

Gedankenspäne.

Viel gibt es, was das Herz berückt,
Den Geist entzückt auf Erden:
Was Herz und Geist zugleich beglückt,
Dem muß die Palme werden.

Dichtertrost.

Klage nicht, in Noth und Jammer
Sei die Schöpfkraft dir versunken:
Unter Schicksals schwerem Hammer
Sprüh'n die schönsten Dichterfunken. G. W.

Recht tröstlich.

Schuster (zu seinem Kunden): „Es wäre doch schon an der Zeit, daß Sie mir die 15 Mark endlich bezahlen würden; ich kann doch wegen einer derartigen Kleinigkeit nicht so oft den weiten Weg machen."

Schuldner: „Na, trösten Sie sich; im nächsten Monat — zieh' ich in Ihre Nähe."

図6

ブレッター』の誌面の左下から右上にかけての3コマ漫画では、互いに対戦相手の鼻先を切り落とし、それぞれ縫合手術を行ったところ、相手の鼻先が自分の鼻にくっついてしまったという悲喜劇が、「メタモルフォーゼ〔変態〕」というタイトルで描かれる[6]。また、図2（図4の右上の図）を良く見ると、切り落とされたヴォルマーの鼻先が、待ち構えていた犬の口の中へと飛びこむ瞬間であることが分かる。決闘試合には学生団が飼っている犬が居合わせることが多かったため、似たような「事件」は風刺の格好のモチーフになった。やはり『フリーゲンデ・ブレッター』に掲載された図6も、決闘試合で切り落とされた鼻が、その場に居た犬の胃袋に消えてしまったという小咄である[7]。

決闘試合で被害に合うのは、鼻だけではない。図3でも示されたとおり[8]、決闘試合の「最終的な効果」は、顔面に残される特徴的な刀傷痕Schmißであり、それこそが怪我をも恐れず立派に闘った決闘試合の勲章、名誉の証とみなされた。そうした傷痕を嘲弄する風刺も少なくない。図7は、1891年の『クラデラダッチュ』に掲載されたものである[9]。「決闘試合勲章」というタイトルが示すとおり、勲章の挿絵が描かれ、次のような説明文がつけられている。

Der Pauk-Orden.

In Bonn bereitet man eine Petition an den Cultusminister vor, in der die Stiftung eines Pauk-Ordens für solche Studenten, die sich auf der Mensur besonders ausgezeichnet haben, in Vorschlag gebracht wird. Das Mittelschild der Decoration soll eine normale moderne Studentenphysiognomie zeigen, während die Arme des Kreuzes mit Schlägern verziert sind.

Anspruch auf den Orden hat jeder, der fünfzig Mal abgeführt ist; wer hundert Abfuhren erhalten hat, bekommt ihn mit Schlägern am Ringe. Die Verleihung erfolgt durch den Prorector in feierlicher Sitzung des akademischen Senats.

図7

ボンでは、決闘試合に際し殊勲甲に値した学生を、決闘試合勲章佩用者に推薦されたしという文部大臣宛の陳情書を準備中である。勲章の中間盾部分には規格通りの現代的学生の容貌が、十字架の各先端部分には決闘試合用の剣の装飾が施される。

本勲章を授与される権利を持つのは、決闘試合で50回相手を戦闘継続不能にさせた者である。それを100回達成した者には、勲章の環部分に決闘試合用の剣が付される。勲章授与は、大学評議会の荘厳な会合の場で学長代理によってなされる。

「規格通りの現代的学生の容貌」とは、挿絵を見れば分かるとおり、縫合手術後と思しき鼻マスクをつけ、顔中が刀傷で埋め尽くされたものである。これは、学生が傷痕を誇りにすることをグロテスクに戯画化しているのみならず、それを勲章のモチーフとし、文面もそれらしくもったいぶることによって、この時期のドイツの市民層（の一部）に見られた受勲への熱意を揶揄することにも成功していよう[10)]。

同様に、1894年の『フリーゲンデ・ブレッター』に掲載された図8も、決闘試

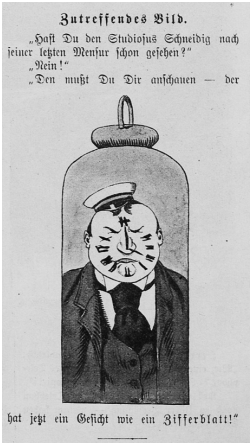

図8

図9

合の結果、「顔面が時計の文字盤のように」なった向こう見ずな学生を笑いものにしている[11)]。こうした風刺画は、学生数の急増する1880年代以降に頻出するように思われる[12)]。しかし、同誌はすでに1876年に、図9のような風刺画を掲載している[13)]。それは、決闘試合用の剣を持ち、頬の刀傷を自慢げに見せている学生の姿を描き、「目印」と題されたものである。画の下にある短いやり取り（A：「あの学生さんはどうしてあんなにメチャメチャでグチャグチャな顔をしているの？」、B：「それはね、彼が学んでいるということを見て取れるようにだよ。それを聞き取ることはできないからね」）が皮肉るのは、大学生であることを、勉学で身につけた教養や知識の披露によってではなく、決闘試合で作った数々の刀傷痕によってしか示すことの出来ない、当代の学生の姿である。

以上から読み取れるように、風刺作家やその作品を楽しむ者にとってみれば、決闘試合は、対戦相手ひいては自分自身の身体を切り刻んで傷つけることを喜ぶ行為に他ならない。それに対し、決闘試合を擁護する者たちは、名誉の尊重や仲間内での規範遵守、目の前の刃に怯えない勇気といった精神的な意義を強

図10

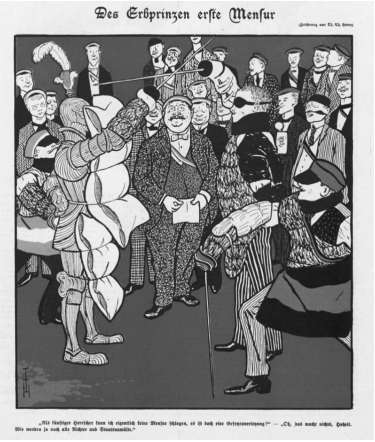

図11

調し、顔面の刀傷こそ、彼らが内面化し得た名誉や規範、そして何よりも勇気凜々の「男らしさ」の証であるとみなす。先に見た図8の学生の名はシュナイディヒ Schneidig ――「勇猛果敢な、威勢の良い、キビキビした」の意[14] ――であるが、この形容詞は職業軍人だけでなく市民男性にとっても上等の褒め言葉であった[15]。しかし、だからといって、誰もがみなマゾヒストのように喜んで身体を切り刻まれたとは考えにくい。むしろ、もう少し楽に刀傷痕を得られるのであれば、それを試みる学生たちがいたと考える方が自然ではないだろうか。「刀傷痕の代わり」と題された図10は、まさにそうした考えを戯画化したものである[16]。学生団の学生たちが、頬の傷を誇らしげに見せながら床屋からぞろぞろ出てくる。その床屋には、髭を剃る時に顔の皮膚を切ってしまう見習いがいる、という皮肉である。剃刀で頬を切られるのも痛かろうが、決闘試合では、怯むことなく正々堂々と闘わなければ、名誉の刀傷を得るどころか、不名誉とみなされて学生団から追い出される羽目になる。髭剃りのついでに名誉の刀傷そっくりの傷をつけてもらう方が、ずっと安易ということであろう。

真剣で闘うのは正直なところ怖いし、傷を負って痛いのもできれば御免蒙りたい。とはいえ、シュナイディヒと思われたいし、決闘試合をやらないわけにはいかない……、そんな揺れる男心をきわめて辛辣に風刺するのが、1901年に『ジンプリチシムス』の表紙を飾った「皇太子の初めての決闘試合」（図11）である[17]。画面向かって左側に立つ未来の君主は、中世の騎士さながらに全身を甲冑で覆い、身体の正面には大きなクッションまで括りつけてある。その姿は、「これなら相手の剣も怖くないし、剣が当たっても痛くも痒くもないぞ」という心の声を具体化したものと言えようが、大袈裟な防備には失笑を禁じ得ない。

「私は、本来ならば、来たるべき君主として決闘試合はできないのだ。決闘試合は法に反しているだろう？」

「あぁ、殿下、お気になさらずに。我々だって皆、判事や検事になるのですから。」

「殿下」はあれこれ理由をつけて過剰な防御策を正当化しようとする。将来の君主としての大事な身体に傷でもつけたら大変、そもそも刀傷痕のせいで君主自らが違法行為をしていたことがバレたら大変、だからこの格好もやむを得ないのだ、と。そんな苦心は、対戦相手の冷静な返答によって一蹴されてしまうのだけれども。この風刺画は、決闘試合が意味する身体への傷害および苦痛、それに対する――ごく自然な感情と思われる――恐怖心を浮き彫りにするとともに、それでもなお決闘試合に駆り立てられる男子学生たちのありようを、見事に表現するものと言えるだろう。

4-3-3. 決闘試合と女性

決闘試合を行うのは男性のみであり、女性はそれを実践することはもちろん、見学することさえできなかった。しかし、だからといって絵入り雑誌に描かれる

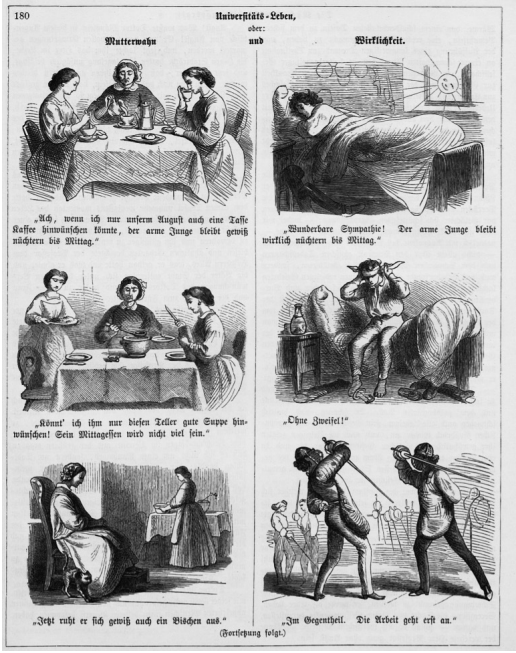

図12

決闘試合に女性が全く登場しないわけではない。数は限られているものの「決闘試合と女性」というカテゴリーに当てはまるものも存在し、それらは二つのグループに分けることができる。一つは、決闘試合を女性とはきわめて関係の薄いものとして描くパターンである。例えば、女性も含む幅広い読者層を意識した絵入り週刊誌『ユーバー・ラント・ウント・メーア』に掲載された画（図3）である。そこには、決闘試合を終えて故郷に帰って来た学生を迎える母親の姿が小さく描かれているが、彼女は醜い刀傷痕で面差しがすっかり変わってしまった息子に対面し、驚愕と憐憫の入り混じった感情を隠しきれない。それはとりもなおさず、息子が精を出している決闘試合について知らなかった――少なくとも良くは知らなかった――ことを表現したものと解釈できる。

同様の例として、1864年の『フリーゲンデ・ブレッター』誌に3回シリーズで掲載された、「大学生活、または母の幻想と現実」という題の風刺作品が挙げられる[18]。ここで取り上げるのはその第1回であるが（図12）[19]、いずれも、誌面の左側には母と娘たちの日常生活の場面が、右側にはそれに対応する息子であり兄

弟である学生の生活の場面が描かれている。図12の「母の幻想」の上段、一日の始まりの朝食の場面で、二人の娘とコーヒーを飲みながら母はつぶやく。「あぁ、私たちのアウグストにせめて一杯のコーヒーでも届けられたら。あの可愛そうな子は、きっと昼まで腹ぺこでしょうから。」しかし、その右側に描かれている現実のアウグストはまだ惰眠の最中で、「確かに昼までは素面だが」と言う。nüchternという形容詞が、「胃が空っぽ＝腹ぺこ」と「素面＝酒に酔っていない」の両方を意味することに基づく駄洒落である。「母の幻想」の中段の昼食場面で、母は、「あの子にこの滋味あるスープを届けられたら。彼の昼食は質素でしょうから」と気遣う。「まさにその通り！」と言うアウグストは起きたばかり。下段の母が、「今ごろはあの子もきっと少し休んでいるでしょう」と言う午後、息子は「全くその逆！　これから仕事さ」と、彼の本来の仕事たるべき勉学ではなく、決闘試合の練習に精を出すのである。

この風刺画は典型的な「親の心子知らず」の描写であり、不孝者の学生を皮肉っていると解釈しうる。確かに、放蕩息子＝学生の親不孝を風刺する作品は少なくない[20)]。ただし、これは「母の幻想」というタイトルであり、シリーズを通して全9場面のうち、家庭には母親と娘たち女性の姿しか描かれていない。学生の「現実」の場面には、酒場の主人の娘と思しき若い女性が登場するものの[21)]、その他の登場人物はみな息子の同士である。大学生活の実態を知らない家庭内の女性たちの日常と、学生の実際の暮らしぶりとが、パラレル・ワールドのように展開される。母に代表される家庭は、決闘試合など知らない女性の世界、無垢あるいは世間知らずの世界という、当時としてはごく一般的なジェンダー観の表出と捉えることが出来るだろう。とはいえ、女性の世界と学生の世界は、生産労働と無為徒食、規律と無法という対比にもなっている。市民男性が徳目としたことが女性や家庭に帰され、彼らが非難すべき悪弊が学生や大学に蔓延っていると示唆することで、ジェンダー的にも階級・社会的にも、現実をさらに一ひねりして皮肉っていると解釈する余地もあるだろう。

図13

決闘試合に女性が登場するもう一つは、全く逆のパターン、すなわち、女性の決闘試合を描くパターンである。本節の冒頭でも述べたとおり、近代を通じて、女性が通常の決闘試合に参加することはあり得なかった。従って、それらはフィクションであり、そのこと自体が世相の風刺と理解できる。図13を見てみよう[22]。これは、『フリーゲンデ・ブレッター』誌の題字の下、画面一杯に描かれたものである。揃いの学生帽や飾りたすきを身に着けたれっきとした学生団の学生たち――ただし、全員が女子学生――が、画の下にあるように、「いざ決闘試合！　剣を構えて！　斬り合い開始！」というお決まりのかけ声とともに、決闘試合を開始したところである。図11と比べても、描かれているのが男性か女性かを除くと、本質的な違いは見出せない。それどころか、「臆病者の殿下」に比して、彼女たちはなんと勇敢に闘っていることだろう。周りで見ている者たちも、自分の所属する学生団の代表が、勇猛果敢にキビキビと名誉ある闘い方をしているかどうか、厳しい眼差しで見つめている。と、その時、誰かが「あっ！」と声を上げる。その続きは、頁をめくって出てくる図14である[23]。今の今まで見せていた勇気や冷静さはどこへやら、剣を投げ捨て、みな驚き怯えたような表情で大慌てである。そして、少しでも高いところに逃げようとしているように見える。その理由は、「鼠だ！[24]」という叫び声である。いかに勇ましく男子学生と同じように決闘試合をして

図14

みたところで、それは虚仮威しにすぎず、女子学生は所詮は小さな鼠に慌てふためく弱虫なのだ、という分かりやすい皮肉である。ところで、図14で描かれている女子学生たちの視線の先にも、画面中のどこを探しても、鼠は見当たらない。彼女たちは、実際の鼠に驚いたのではなく、「鼠だ」という声だけで、そして、その声を疑いもなく信じ込むことでこれほどまでに狼狽するのだ、という嘲りも込められているのだろう。

図15と図16は、描かれたのがそれぞれ1873年と1903年でちょうど30年の開きがあるものの、いずれも「未来の女子学生」もしくは「未来の像」というタイトルの女性の姿である。図15は「未来の女子学生」として3頁にわたって描かれた11場面の最初のものである[25]。キャプションの「すごい女狐」は[26]、学生団の象徴となるアイテム――学生帽、飾りたすき、タバコ、ブーツ、犬――を有しているだけでなく、正式の団員となった証拠、すなわち決闘試合を勇敢に闘った証である頬の刀傷を誇示している。一方、図16の女性はウェディングドレス姿であり、

図15

図16

どういう花嫁かを問われた人が、「呆れるほどシュナイディヒな女だよ！　あいつは法学を学んで、決闘試合を10回やったんだ」と答えている[27]。いずれも「未来の」、ということは、その時点では実現されてはいないけれども、近い将来には起こり得るかもしれない女性像を描き、世相を揶揄しているとみなしうる。その世相とは、言うまでもなく、女性運動の高まりと不可分な関係にある、女性の大学への進出である。

決闘や決闘試合を非文明的で野蛮な慣習であると非難する声に対し、その擁護者たちは、決闘こそが勇気や決断力、自らの名誉を自身の力で守るといった「シュナイディヒな男らしさ」を育むものであり、社会が「女々しく」なるのを阻止するものなのだ、という主張を行った[28]。「女々しい」というのは、シュナイディヒでないこと、つまりは意気地がなく、優柔不断で行動力に欠けているといったことである。図15、16の風刺画は、そうした主張を逆手に取って皮肉っているとも考えられる。女性が大学生になり、学生団で決闘試合を行うようになれば、彼女たちもシュナイディヒで「男らしく」なるはずで、そうなれば「女々しい」という語が成立しなくなるからである。

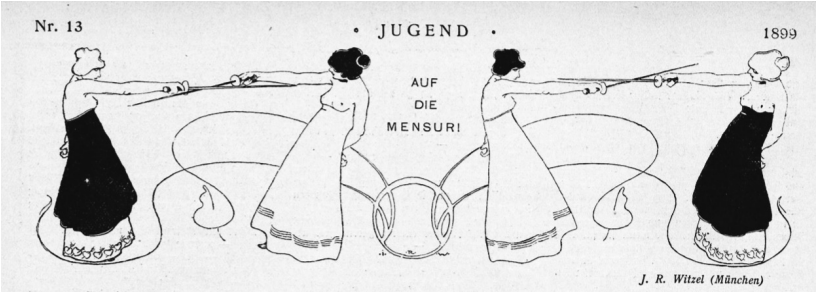

図17

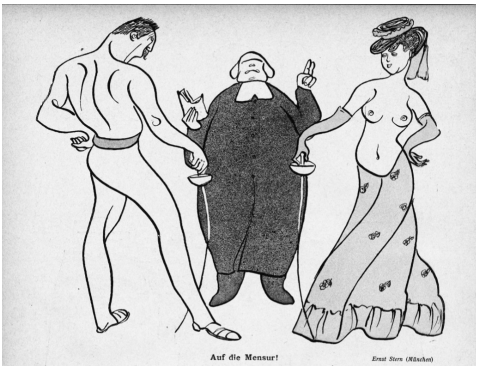

図18

最後に、女性の決闘試合を描くパターンの一変種を見ておこう。『ユーゲント』誌に掲載された図17、18は、典型的なユーゲントシュティール（アール・ヌーボー）風の画であり、いずれも„Auf die Mensur!〔いざ、決闘試合！〕“という題である。図17は、ユーゲントシュティールの特徴である植物の蔓や若い女性などのモチーフ、曲線を用いながら、そうした性質とは相容れない「シュナイディヒであること」を旨とする決闘試合の場面を描いており、それ自体がアイロニカルな画とみなされうる[29]。図18も、上半身裸の若い男女が向き合い、決闘試合を始めようとしているところを曲線の優美さを生かしつつデフォルメして描いたも

のである[30]。通常の決闘試合の審判が立つ位置にいるのは、宣誓を求める聖職者である。つまり、結婚の誓いの場面が決闘試合の開始に模して描かれているのだ。結婚にあたっては、女性も男性と平等である、ということを示唆しているとも、結婚生活とは決闘試合のような闘いである、という皮肉が込められているとも解釈できる。実際には決闘試合を行うはずのない女性が、決闘試合にはありえない格好で描かれることに、「世紀末」のドイツ社会における女性の存在感の高まりを読み込むことも可能であろう。

おわりに

3回に分けて検討してきた「メディアにみる近代ドイツの『決闘試合』」をまとめることにしよう。

まず、「長い19世紀」を通じて、決闘試合がメディアにおいて一定のプレゼンスを有していたことが確認できた。当時のメディアと言えばプリント・メディアであり、その「主役」を務め続けたのが新聞（日刊紙）であったとすると、製紙・印刷技術の革新や資本主義的な出版・流通制度の発展、識字率の向上、読書や観劇などの娯楽文化の浸透といった背景とともに変わりゆく「準主役」あるいは「相手役」としてのプリント・メディアにおいても、決闘試合は話題にされた。ここでは、登場・普及の背景や書き手の意図、想定される読者層、実際の読み手の範囲や読まれ方などがそれぞれに異なる三種類のプリント・メディア――パンフレット、文学作品、絵入り雑誌――を取り上げた。

パンフレットは、原則として知識人が自らの政治的信条や志操を仲間内に向けて発するもので、主題に関心を持つ人が意識的に手に取って読むものである。今回は、決闘試合の非を説き、その廃止に向けて学生たちの心を動かそうとする大学教授の手になるパンフレット2点しか取り上げられなかったが、決闘試合について書かれたパンフレットや書籍の出版は19世紀を通じて見られた[31]。それら

は決闘試合を正面から論じることで、読み手に決闘試合についての情報を直接に伝える役目を果たした。読み手たちの社会的地位とそれゆえの影響力を考えるならば、決闘試合の媒体としてパンフレットは軽視されるべきではないだろう。

他方、広義の知識人に分類されうる作者たちの手になる文学作品や絵入り雑誌の読者は、多様性や人数の点で、パンフレットのそれを凌駕していた。決闘や決闘試合そのものを主題にした文学作品は別として、ここで取り上げた文学作品――詩、小説、戯曲（演劇）――においては、決闘試合が中心的に扱われているわけではない。人びとは、有名詩人の詩集、流行の小説、人気の戯曲やその上演を読んだり見たりするなかで決闘試合に遭遇する。事細かな描写はなされていなくとも、登場人物の心情ひいては読み手の感情に作用する通奏低音のモチーフとして、決闘試合を否応にも想起させる表現が見いだされるからである。直接に決闘試合を論じるパンフレット類を女性たちが手に取ることはそう多くなかったと考えられるのに対し、彼女たちが、文学作品などの媒体によって決闘試合をめぐる同時代の認識を半ば無意識のうちに取り込んだ可能性はきわめて高いと言って良いだろう。そうした意味において、19世紀後半に全面的に開花した絵入り雑誌の意義を強調しすぎることはない。市民家庭で読まれること、すなわち、主要な読者として良妻賢母をも念頭に置く『ガルテンラウベ』のような雑誌にさえ、決闘試合の様子を描いた大判の図が掲載されたのである。決闘試合には全く関心がなくとも、雑誌の頁を繰ることでそのイメージが目に飛びこんでくるのだ。『ユーゲント』誌も然り。芸術と生活の高度な融合を目指すカラフルなグラフィック誌を手に取る者がみな、決闘試合そのものに特別の興味を抱いていようとはおよそ思えないが、彼らもまたそのモチーフを目にしないわけにはいかなかった。当時のドイツにおいて決闘試合を実際に行ったり直接に見たりした人は限定的であったものの、決闘試合の観念はメディアというフィルターを通して社会のなかにかなり浸透していたのである。

では、それはどのような形で浸透していたのだろうか、換言すれば、様々なメ

ディアで決闘試合はどう描かれていたのだろうか。総じて決闘試合を手放しで礼賛するようなものは見られなかった、というのは驚くに値しないであろう。確かに、決闘試合や決闘の非を論じ、即時の廃止を訴える声に対し、それらを擁護する論調もあったことは事実である。しかし、擁護論は決闘試合に対する社会的批判が高まったからこそ出てきたものであり、批判への必然的な自己防衛反応の結果とみなされうる。このことは逆に、近代になっても決闘試合や決闘が実際に続いていた証左にもなるのだが、いずれにせよ、メディアの支配的な傾向は、決闘試合を非難するものであったと言って良いだろう。ただし、そのトーンは一律ではなく、廃止に向けて諭し促すようなものから、単なるからかいに過ぎないようなものまで濃淡があった。もっとも、そこには共通して、決闘試合の行き過ぎた暴力性や違法性を非難しつつも、決闘試合を行える立場にある大学生へのある種の敬意――敬意が言い過ぎであるならば青臭い若者への憧憬――や慣習の力への理解が見え隠れしているように思われてならない。

とくに、決闘試合が体現するとされるシュナイディヒカイト、すなわち勇猛果敢、威勢の良さ、キビキビした／キリッとした姿勢に対する根本的な価値は、「男らしさ」として、暗黙裡に前提とされていた。それが明確に読み取れるのは、決闘試合に関連して女性が描かれる場合である。シュトルムの『学生時代』にせよ、マイヤー＝フェルスターの『アルト＝ハイデルベルク』にせよ、そこで読者の気を惹く役目を担っているのは、シュナイディヒな人物、あるいは「男らしさ」を素直に肯定している人物である。そして、作品に登場する女性たちはみな、彼らに魅了される。魅了されるということを通じて、間接的にではあれ、そこには「男らしさ」の対としての「女らしさ」が構築される。絵入り雑誌に掲載された図にしても、決闘試合に明け暮れる男子学生の愚の滑稽さは様々に表現される一方で、シュナイディヒカイトそれ自体を嘲笑するような要素は見いだせなかった。それどころか、風刺雑誌の代表格である『ジンプリチシムス』の表紙絵（図11）が示すように、旧弊な決闘試合がやり玉にあげられつつも、そこで実際

に嘲笑の対象となるのは、「未来の君主」の臆病で卑怯な態度である。そうした態度は、男らしくないもの、「女々しい」ものとみなされ、男性はもちろん、女性からも、蔑み、侮り、嘲られることとなる。『フリーゲンデ・ブレッター』の表紙を飾った女性たちによる決闘試合の図（図13、14）の落ちは、小さな愛玩動物とも言える鼠（が出たという声）によって、シュナイディヒを装っていた女性たちの化けの皮が剝がれた、すなわち、女性はシュナイディヒではない、というものであった。

以上から、近代ドイツの社会では、決闘試合が非難されつつもシュナイディヒな「男らしさ」の分かりやすい表象として受け入れられていた、と解釈することは容易であろう。ただし、留意すべきは、少なくとも絵入り風刺雑誌においては、19世紀最後の30年ほどの間にシュナイディヒカイト称揚の傾向が強まっているように見える点である。これは、一般にはヴィルヘルム期に顕在化したとされる「社会の軍事化」の証しとみなされよう[32)]。しかし、シュナイディヒな「男らしさ」の強調は、女性の決闘試合をモチーフにした風刺画の登場と軌を一にしている。「社会の軍事化」におけるシュナイディヒカイトの重要視はなかば自明のことであり、敢えて揶揄の対象になったとは考えにくい。実際、風刺雑誌で皮肉られているのは、シュナイディヒカイトそのものでなかったことは既述の通りである。シュナイディヒな「男らしさ」の強調と捉えられるものは、その逆の状態、つまり、臆病であることや「男らしくない」こと、「女々しい」ことへの当て擦りであり、むしろ、社会における女性のプレゼンスの高まりへの反応として解釈されるべきではなかろうか。これは、19世紀後半に「女性解放運動」が進んだ結果[33)]、それまでは一義的に男性世界であった大学に女性も足を踏み入れることになったという客観的事実を反映するだけではない。そうした新しい事実とそれがもたらすに違いない社会の変化に対して、まずは風刺という形を借りて防衛反応を見せた既存の社会のあり方をも示しているのだ。

注

1) 本稿の前編は、「はじめに」から4-2-2までが、「メディアにみる近代ドイツの「決闘試合」(上)」として『立正大学人文科学研究所年報』第54号 (2017年、pp. 1-15) に、4-2-3から4-3-1までが、「メディアにみる近代ドイツの「決闘試合」(中)」として『立正大学文学部論叢』第141号 (2018年、pp. 57-76) に掲載された。
2) *Der wahre Jakob*, 1888, Nr. 58, S. 460.
3) „die lange Nase“ とは、字義通りには「長い鼻」であるが、芥川龍之介の短編小説『鼻』の主人公のように顎の下まで垂れ下がるような「長さ」ではなく、挿絵にもあるように、前方に突き出した「長さ」である。日本語の表現ではむしろ「高い (高すぎる) 鼻」となるだろう。注5も参照。
4) 文中では „Duell, Zweikampf〔決闘〕“ という語が使われているが、挿絵は、ピストルによる決闘ではなく、防具眼鏡はつけていないものの、典型的な決闘試合として描かれている。
5) 原語は „die kurze Nase〔短い鼻〕“ であり、もちろん、„die lange Nase“ の反対語として使われている。「低い鼻、鼻ぺちゃ」とも訳しうるが、ここでは、それらしく「小ぶりの」とした。
6) *Fliegende Blätter*, 1891, Nr. 2379, S. 78.
7) 「昨日の決闘試合でどんな結果が生じたんだい？」「生じた？　何も生じてやしないよ。消えたんだ。鼻先が。」「どこに消えたんだい？」「突き止めようがないね。学生団の5匹の犬がそこに居たんでね。」ある結果が「生じた<u>heraus</u>gekommen」という語と、何かが取り去られて「消えた<u>weg</u>gekommen」という語による言葉遊びの要素を持った風刺である。
8) 森田「メディアにみる近代ドイツの「決闘試合」(中)」、p. 71.
9) *Kladderadatsch*, 1891, Nr. 44, S. 83.
10) これについては、例えば以下を参照。A. Thompson, “Honours Uneven: Decorations, the State and Bourgeois Society in Imperial Germany”, in: *Past and Present*, 144-1 (1994), pp. 171-204.
11) *Fliegende Blätter*, 1894, Nr. 2537, S. 105.
12) 森田「メディアにみる近代ドイツの「決闘試合」(上)」、p. 3.
13) *Fliegende Blätter*, 1876, Nr. 1605, S. 136.
14) 姓が形容詞と同一の例は、Lang (長い)、Stark (強い) などいくつか存在することから、Schneidigという姓も絶対にないとは言い切れないだろう。そうした命名の妙

も風刺作品の一部である。

15）これについては、例えば以下を参照。N. Elias, „Die satisfaktionsfähige Gesellschaft“, in: M. Schröter (Hg.), *Norbert Elias. Studien über die Deutschen. Machtkämpfe und Habitusentwicklung im 19. und 20. Jahrhundert*, Frankfurt a. M. 1989, S. 61-158, bes. S. 111-118. 同書の邦訳（青木隆嘉訳『ドイツ人論―文明化と暴力』（法政大学出版局、1996年）、pp. 96-103））では、シュナイディヒは「キリッとした」である。

16）画に添えられたテキストは次のとおり。「それにしても床屋さんよ、あの見習いをクビにしないのかい？　彼はヒドイ皮剝職人だよ。髭剃りさせると顔の半分を切り取っちゃうじゃないか。」「いやいや、あいつに暇なんか出すものか。彼に代わる奴は見つからないよ。あいつを雇って以来、学生たち皆が皆、彼に髭を剃ってもらいに来るんだから。」

17）*Simplicissimus*, Jg. 6 (1901), Heft. 8, Titelbild.

18）*Fliegende Blätter*, 1864, Nr. 987, S. 180; Nr. 988, S. 192; Nr. 989, S. 200.

19）*Fliegende Blätter*, 1864, Nr. 987, S. 180.

20）典型例として、「金がかかる蔵書」というタイトルの風刺画（*Fliegende Blätter*, 1853, Nr. 408, S. 191）が挙げられる。そこでは、痩せた父親――息子への仕送りのために身を粉にして働いたことを容易に想起させる――が、息子の部屋を訪れ、本棚を覗いて驚き呆れている。立派な棚には書物の影も形も無く、決闘試合用の剣やブーツなどのガラクタがいくつか転がっているに過ぎない。「つまりこれが、私にとってあんなに金のかかった、お前の蔵書というわけだな?!　もちろん、お前の御学友氏のも含まれているわけだね」と言う父親を前に、息子はうなだれ、その脇で「御学友」も頭をかいている。

21）*Fliegende Blätter*, 1864, Nr. 989, S. 200.

22）*Fliegende Blätter*, 1905, Nr. 3110, S. 109.

23）*Fliegende Blätter*, 1905, Nr. 3110, S. 110.

24）この鼠はMaus、すなわち愛らしいとされるハツカネズミ（縮小形のMäuschenは、子どもや恋人女性を呼ぶ際に使われたりもする）であり、害獣として嫌われる鼠Ratte（イエネズミ、ドブネズミ）ではないことも、皮肉と捉えることができるだろう。

25）*Fliegende Blätter*, 1873, Nr. 1443, S. 85-87.

26）学生団の新入生はFucks（キツネ）、通常、親しみを込めて「すごいキツネ（klasse Fuchs）」というジャーゴンで呼ばれる。ここでは、それを女性形にして用いている。

27) *Fliegende Blätter*, 1903, Nr. 3044, S. 256.

28) これについては、例えば以下を参照。U. Frevert, *Ehrenmänner. Das Duell in der bürgerlichen Gesellschaft*, München 1995, S. 264-286.

29) *Jugend*, 1899, Nr. 13, S. 210.

30) *Jugend*, 1902, Nr. 49, S. 826. 以下も参照：井戸田総一郎「(図書館特別資料紹介) 雑誌『ユーゲント』の魅力――言葉・デザイン・図像」(明治大学図書紀要『図書の譜』第9号 (2005年)、pp. 1-10)。ただし、「メンズゥァ (Mensur) とはドイツの古い学生組合のしきたりに従って行われる決闘のことであり、刀剣による傷がすぐに判別できるように上半身裸で戦う慣わしであった」(p. 5) とある後半は誤解である。

31) 例えば、H. E. G. Paulus, *Wider die Duellvereine auf Universitäten und für Wiederherstellung der Akademischen Freiheit. Nebst Privat-Notizen und Betrachtungen über die neuesten Anmassungen der Duellvereine auf der Universität Heidelberg*, Heidelberg 1828; H. Stephani, *Wie die Duelle, diese Schande unsers Zeitalters, auf unsern Universitäten so leicht wieder abgeschafft werden könnten*, Leipzig 1828; K. H. Scheidler, *Ueber die Abschaffung der Duelle unter den Studierenden; mit besonderer Rücksicht auf die hierauf bezüglichen Schriften des Hrn. Geh. Kirchenrath Dr. Paulus und des Hrn. Krichenrath Dr. Stephani*, Jena 1829; Freiherr v. Stengel, *Ueber die Duelle auf den deutschen Universitäten, in besonderer Beziehung auf das Großherzogthum Baden*, Freiburg 1832; A. Ebrard, *Das Duell unter Studierenden*, Erlangen 1843; B. Dalei, *Ueber Duell und Ehre. Mit besonderer Rücksicht auf Studentenduelle*, Constanz 1844; F. J. Egenter, *Ueber Duell und Ehre. Mit besonderer Rücksicht auf Studentenduelle*, Leipzig 18783.

32) これについては、例えば以下を参照。望田幸男『軍服を着る市民たち―ドイツ軍国主義の社会史』(有斐閣選書、1983年)。

33) ドイツの「女性解放運動」の概説については、例えば以下を参照。ウーテ・フレーフェルト／若尾祐司 他訳『ドイツ女性の社会史―200年の歩み』(晃洋書房、1990年)；姫岡とし子『近代ドイツの母性主義フェミニズム』(勁草書房、1993年)。

(2019年1月27日受理，2019年2月8日採択)